

額ひたいから流れ落ちた汗は顎先あごさきを伝つたい、コンクリート上したたへと滴たり落ちていく。

信号待ちしんごうちのその最中さなか、頭上ずじょうから燦々さんさんと照り付ける夏の日差しに目めを細めほそめつつ、児嶋こじまは湿しめった手の甲てこうでとめどなく溢あふれるそれを拭ぬぐいつつ、
い続けていた。

病院びょういんから然程さほど離れていない場所ばしょでの往診おうしんなのだから、わざわざタクシーのひつように乗る必要ひつようもないだろうと徒歩とほで出掛けでかた判断はんだんはどうやら間違まちがいだっらしい。年々ねんねん、勢いきおいを増ましていくような日差しはものの数分すうぶんで冷房れいぼうにより冷えていたはずの児嶋こじまの全身ぜんしんを汗で濡ぬらし、容赦ようしやなくその水分すいぶんを奪うばい続けるのだ。

眼前がんぜんの信号しんごうは未だ赤色あかいろを灯ともしたまま、乗用車じようちゆうしやたちの往来おうらいを許ゆるし、歩行者ほこうしやの往く手ゆてを遮さへきっている。

ただその場に立ち止またどっているだけにも関わらず、児嶋こじまの呼吸こきゅうは徐々じょじょに弾みはす、普段ふだんは青白い頬ほほすら上気じようきして燦くすくるような熱ねつを持もつた。

やけに長い赤信号あかしんごうだと密かひそかに溜息ためいきを零こぼしたその時とき、

「お前まえ、混沌こんとんに触れたな」

背後はいごから凜りんとした男おとこの声音こゝろこゝろが、唐突とうとつに問いかけてきた。

驚おどろいて振り返かえろうとした瞬間しゆんかん、児嶋こじまは信じられない光景こうけいを目まの当たりにする。

どこまでも広がる青空あおぞらが、照り付ける日差しが、足を止めていた赤信号あかしんごうの明かりが、過ぎ行くすべての色いろが――消え失せていた。夢ゆめでも見ているのだろうか。

児嶋こじまの額ひたいから、今度は熱射ねつしやによるものではなく、恐怖きようふから溢あふれ出した汗あせが顎先あごさきへと新たに伝つたい落ちていく。

「……！」

恐おそる恐おそる、背後はいごを振り返かえる。

そこに佇たたずんでいたのは「児嶋自身こじまじしん」であった。

「更なる狂気が欲しいか」

「……ッ、あ……」

薄く笑みうすえを浮かべた己おのれが、上気じようきした児嶋こじまの頬ほほを包つつむ。
嫌だとも、やめてくれとも言えなかったのは、慄おのきに喉のどを塞ふさが

れた為か、それとも心のどこかで恐怖を望んでいたからなのか。

「僕は……」

だが、しかし。返答を口にしようとしたその直前、強烈な眩暈と共に色を失くしていたはずの世界が、動き出す。

茹だるような日差しと白昼夢のような事象に掻き乱され、児嶋は念願の青信号がようやく灯ったにも関わらず、その場に蹲り、今にもなにかを吐き出してしまいそうな自身の口元を掌で覆った。

「あの、大丈夫ですか」

その声を掛けてきたのは、背後に佇んでいた例の己自身——ではなく、見知らぬ長身の若い男である。

「ッ、すみません。少し気分を悪くしてしまつて……」

取り繕いながらも差し伸べられた親切な手を握り返したその瞬間、

「混沌へようこそ、児嶋さん」

男は嗤い、ふらつく児嶋を優しくその腕へと抱いたのであった。